

「青年海外協力隊」

# 伊藤 優花

ITO Yuka

日本の産業発展を支えた  
考え方を生かす

3歳の時に父親を亡くした経験から、将来は看護師になることを心に決めた伊藤優花さん。中学生になり、全ての人たちに医療が行き届いていない開発途上の現状を学んだことで、日本から遠く離れたアフリカが憧れの地となった。看護大学を卒業した後は、地元の病院で看護師としての仕事をスタートさせたが、アフリカに行きたいという夢を時折思い出している。「日本で働く方が世の中のためになるのではないか」「母親を一人日

PROFILE

1986年愛知県出身。県立看護大学を卒業後、名古屋セントラル病院の消化器外科病棟の看護師として勤務。2014年6月から青年海外協力隊（看護師）としてタンザニアで活動中（現職参加）。

## JICA Volunteer Story



現地のスタッフに、物品を整理する大切さを伝える伊藤さん

### 「問題意識を持ち、解決していける仕組みを」

幼いころから、看護師になりアフリカに行くことを志していた伊藤優花さんは、青年海外協力隊として、今、その夢を実現させている。派遣されたのは、課題が山積するタンザニアの病院。そこに、日本生まれの「5S」の考え方を普及させようと、日々奮闘している。



本に残しても良いのか」というさまざまな葛藤の中で悩んでいた。しかし、就職から5年の節目を迎えた一昨年、大きな決断をした。「このままでは一生後悔する」と思い、長年の夢を思い切って職場に打ち明けました。職場の人たちは、そんな私を応援してくれました。すぐさま青年海外協力隊に応募し、昨年、晴れて東アフリカのタンザニアへの派遣が決まった。

伊藤さんの任務は、南東部のムトラ市にある病院で「5S」を普及させることだ。5Sとは、整理、整頓、清掃、清潔、しつけの頭文字を取ったスローガンで、日本の製造業で発展した品質管理の手法である。工場を中心に多くの途上国でも取り入れられてきたが、2007年、それを医療機関にも広めようというプロジェクトがアフリカの15カ国で始まった。伊藤さんの派遣先もその一つだ。これまでの経験を生かそうと意気込む伊藤さんだったが、赴任初日、病院内の光景を見て驚かされることになった。物の置き場所がきちんと決められていないため、カルテが頻りに紛失する。薬品や物品が適切に補充されておらず、何かが不足していることが多い。プロジェクトが始動して既に5年以上が経っていたが、5Sの考え方が取り入れられているとはとても言えない状況だったという。「現地のスタッフは5Sを知識としては知っていましたが、ただ物を片付けて、見た目が美しくなれば良いとしか考えていませんでした。そこで、作業効率が上がった、安全につながったりという、目には見えない本来の効果を伝えることから始めようと考えました」。

### 協力者が増えたことで 活動の輪が広がった

まずはモデル病棟を決め、そこを中心に活動を展開することにしました。物を置く場所を決め、資料の並べ方や物品の補充を行うタイミングなどをスタッフに指導した



a. 煩雑に置かれていた書類や資料を分類して保管するため、収納ボックスを作った  
b. 病院の質の向上を目指すチームの定例会議。メンバーそれぞれが責任感を持ち始めている  
c. スタッフとの関係づくりを大切にしている伊藤さん。5Sに意欲的な協力者は確実に増えている

が、そもそも病院内の現状を問題として捉えていない人が多く、一様に後ろ向きな反応が返ってきた。さらに、「言葉の壁」も立ちはだかった。「会話はスワヒリ語が中心で、英語はほぼ使わない環境でした。5Sを普及させるためにも、最低限のコミュニケーションは欠かせないと考えました」と伊藤さん。それから、スワヒリ語を勉強し、なるべく多くの人たちの名前を覚えようと努力した。「タンザニアではあいさつを大切にしている文化があるので、出会ったら名前を呼び、笑顔であいさつすることを心掛けるうちに、次第にスタッフとの関係も良好になっていきました」。

このことは、5Sの活動にも変化をもたらした。職場環境の改善に主体的に取り組む協力的なスタッフが少しずつ増えたのだ。また、伊藤さんは、病院の質の向上を目的として現地スタッフで結成されたチームの運営もサポートしているが、当初は3人ほどしか集まらなかった。会議にも、今では10人以上が出席するようになった。「当初は、病院にはお金がない、場所が狭いというような文句の言い合いでした。そこで、不要になった空き箱を再利用する方法など、資金を投入せずとも実践できることを伝え続けた結果、何が本当に問題で、どうすれば解決できるのかをそれぞれが考えるようになりました」。

最近では、モデル病棟以外のスタッフからも5Sを取り入れたいと声を掛けられるという伊藤さん。そこで、なるべく多くの病棟を訪問して、アドバイスを提供できるようにになった。「目標は全ての部署で5Sを定着させることです。これまで私が中心となって推進してきた5Sの波を、今度は現地のスタッフが中心となって広げていける形を目指していきます」と伊藤さんは語る。

任期は残り一年を切った。伊藤さんは既にその先を見据え、本当の意味で現地に根付いた5Sを目指し、まい進している。